博士論文執筆経験談

平成23年3月修了生　**山田　裕子**
元：教育構造論講座所属　現：北里大学健康管理センター講師

8年がかりで博士課程を修了した私に博士論文執筆経験談の依頼を頂いた時、最初は何かの間違いと思いましたが、成功例ばかりではなく、思い通りに進まなくても続けることで次の道に繋がった例があってもよいように思い、お引き受け致しました。

私の博士論文執筆体験

私は、大学卒業後2年間の就業を経てから、心理カウンセラーになることを目指して渡米し、アメリカで修士号を取得後帰国、その翌年に東京学芸大学大学院連合学校博士課程に入学しました。当時、日本でもアメリカの大学院環境と同様に学べると思い込んでいた私は、臨床の仕事を続けながら博士論文執筆に取り組むつもりでしたが、日本ではその両立が非常に困難であることを早々に思い知らされました。今でこそ少しずつ改善されていますが、仕事の合間に文献を調べようとしても、インターネットでアクセスできるデータベースにはアブストラクトが掲載されていない、図書館の開館時間は短くほとんど利用できない等、日本では働きながら博士論文を書くための物理的環境が十分ではありませんでした。主指導教員であった宮下一博先生からは、仕事を辞めて論文執筆に集中するようご助言をいただきましたが、当時の私は臨床の仕事にも意欲を燃やしており、臨床を諦める気持ちにはなれませんでした。年齢的にも、親には経済的に迷惑をかけたくないという気持ちや、生活水準を落としたくないという気持ちがあったのも正直なところです。とはいえ、頑張れば何とかなるという気持ちだけでは物理的な壁は乗り越えられず、修士論文を基に仕上げた『学校教育学研究論集』に掲載された論文以降、博士論文執筆に向けての作業は遅々として進みませんでした。

臨床を続けながら博士論文を執筆しようとした私にとってもう一つ大きな悩みとなったのが、臨床的興味と研究テーマのズレです。当時臨床を楽しんでいた私は研究者としてのアイデンティティが薄く、臨床にのめりこむうちに博士課程で取り組む計画であった研究テーマから自分の興味が逸れてしまい、研究の意義を見失いがちでした。何のために博士号取得を目指しているのかが分からなくなり、「自分には向いていない」という思いが何度も湧きあがりましたが、ただ諦めるという決断もできず、臨床に打ち込むことで研究については現実逃避をしていたと思います。

論文執筆に向き合うことに苦しみながらも少しずつ作業を進めていた私にとっての更なる試練は、幾度にも亘った投稿論文の再審査でした。最初の投稿から受理に至るまで、途中でレフェリーの1名が交代するという異例の事態もあり、実に2年半以上の年月を要してしまいました。留年と休学をフル活用し、在籍可能年限まで残り1年というところでようやく論文が受理され、博士論文執筆の要件が揃いました。

最後の1年は、それまで週5日入れていた臨床の仕事を週4日に減らし、有休を最大限利用する等周囲の理解と協力を得て、論文執筆を優先しました。最後にギアを切り替えてゴールまで走り抜けることができたのは、宮下先生の励ましとご指導のおかげです。日本の大学院の常識を理解していなかった私に呆れることも多々おありだったろうと拝察しますが、宮下先生はそのような私を理解して見守り、必要な時に背中を押して下さいました。博士論文執筆において、多くの方々が指導教員との関係の重要性について述べていますが、私が博士号取得にこれだけ長い年月を費やしながらも何とか自分を見失うことなく歩んでこられたのは、私の性格や個性を理解して導いて下さった宮下先生のおかげと感謝しています。

後輩の皆様へ

博士論文執筆にあたり、私が自身の経験における反省を含めて重要と考えているのは以下の点です。①博士論文執筆の間は自分のアイデンティティを「研究者」におく、②研究に集中できる生活環境に身を投じる、③指導教員の助言は真摯に受け入れる、④人とのつながりを大切にする、⑤「みっともなくても続ける」「諦めない」の先に光がある。

私は、博士論文執筆の過程において“博士号は足の裏の米粒”（取らないと気持ち悪いけれど、取っても食べられない）ということばを知りましたが、私にとって幸いにもそのことば通りではありませんでした。カウンセラーとして臨床業務をさせていただいていた職場で、博士号取得見込みとなったその年に専任講師の公募があり、おかげさまで現職に就くことができました。「結果オーライ」ということですが、人生、どこで結果が出るかは分かりませんので、次の道筋が見えずに諦めたい気持ちになってしまっている時は、何とか続けてみることで見えてくるものがあるように思います。私にとっては、諦めがつかないまま周囲に支えられながら何とか進んできたことが、結果としてよかったように思っています。

とはいっても、私が通ってきた道はえらく遠回りであり、このような道筋でも何とかなった人もいる、という一例に過ぎません。後輩の皆様には、私の取り組み方を反面教師としていただき、行き詰ってしまった時に、このような人もいたのだから…と励みにしていただければ幸いです。